

論

衡

漢代の異端的思想——王充著 大滝一雄訳

東洋文庫 46

平凡社

論衡

漢代の異端的思想

王充著
大滝一雄訳

新刊たぎがす

大滝一雄 大正7年新潟県生, 東京大学文学
部中国哲学科卒, 独協大学助教授, 現住所 東京都
練馬区東大泉町1248

論 衡

東 洋 文 庫 46

昭和40年7月10日 初版発行

昭和45年6月25日 再版発行

定価 350 円

検 印

訳 者 大 滝 一 雄

省 略

東 京 都 千 代 田 区 四 番 町 4 番 地

発行者 下 中 邦 彦

発行所

郵便番号 102

東京都千代田区四番町4番地

振替・東京 29639

株式会社 平 凡 社

落丁・乱丁本はお
取替えいたします

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

© 株式会社 平凡社 1965

0110-800460-7600

目次

自紀篇	—作者の自伝—	三
逢遇篇	—君主との「めぐりあい」について—	三
累害篇	—中傷について—	四
物勢篇	—「物」の本質について—	五
異虚篇	—異変や災害にたいする説明の嘘をただすこと—	六
雷虚篇	—雷にたいする説明の嘘をただすこと—	七

芸増篇	— 儒教の經典にみられる誇張について —	九三
問孔篇	— 孔子のことばを検討すること —	一〇五
超奇篇	— もっともすぐれた文章とはなにか —	一四三
商虫篇	— 害虫論の誤りをただすこと —	一五五
自然篇	— 自然には意志があるのか —	一六四
論死篇	— 靈魂の行方について —	一八〇
実知篇	— 超經驗知と經驗知について —	一九五
対作篇	— この著作について —	二六六

論^{ろん}

衡^{きやう}

大^{おほ} 王^{おう}

滝^{たき}

一^{かず}

雄^お 充^{じゆう}

訳 著

自紀篇

—作者の自伝—

王充おうじゆうは、会稽郡かいけいぐんの上虞じやう（浙江省）の出身で、またの名は仲任ちゆうじんといった。その祖先は、もともと魏郡ぎくんの元城げんじやう（河北省）の一氏族だったが、幾代めかのときに従軍して手柄をたて、会稽郡の陽亭やうてい（安徽省）を領地として賜わった。ところが、ある年のこと、思いがけなくも国家が断絶してしまったので、上虞（住）に家を移し、農業や養蚕で生計をたてることになった。曾祖父は向こう気がつよく勇み肌で、なにからなにまで人と反そりが合わなかった。凶作の年に、勝手なことをして傷害殺人もやらかしたので、恨みをもつ

敵がたくさんできてしまった。たまたま世の中が乱れたとき、その敵の手に落ちはしないかと気づかれたので、祖父の汎はんは家族ぐるみ荷物をまとめて会稽に避難してきた。そして錢塘県せんとう（杭州）におちつき、商業で生計をたてたわけだ。子どもがふたりあって、上を蒙もう、下を誦しよといったが、その誦が充の父である。先祖だいたい勇み肌のほうだったが、蒙と誦になると、いよいよはなはだしかった。そんなわけで蒙と誦は、威勢のよきでは錢塘でもひけをとらず、はてはまた勢力家の丁伯ていはくらと遺恨をかまえ、家族そろって上虞に移住することになった。

建武三年（西紀二七年）に充が生まれた。幼いき、仲間と遊ぶにも、あまく見られたりすることを好まなかった。また、仲間が雀とり・蟬とり・賭け銭・木登りなどをしておもしろがっていても、充だけはそんなことをしようとしなかった。それで、誦

も、これは珍しい子だと思つていた。

六歳で書物を教えられたが、慎みぶかく優しく礼儀作法も心得ており、おごそかで、もの静かで、大器たらんことを志していた。父に鞭を加えられたこともなく、村人に悪口をいわれたこともなかった。

八歳で手習塾に通つた。塾には子どもが百人からいたが、みな過失をしかしては、着物をはがされて痛いめにあわされたり、あるいは字がへただとして鞭を加えられたりしていた。けれども、充は日ごとに手があがり、また過失をおかすようなこともなかった。手習いが仕上がると、師について『論語』と『書経』を学び、日に千字ずつ暗誦した。

經書（四書・五經など儒教の經典）に通じ道徳も身に備わると、師のもとを離れて独自のことにうちこむことにし、筆をとっては、すぐれたものをたくさん書いた。読破した書物も、日ましに数を加えた。才たけてはいたけれども、いいかげんに書きなぐる

というようなことは好まなかった。弁もたつたが、ひととおしゃべりすることは好まず、語るに足る相手でなければ、一日じゅう口をきかなかった。その所論は、はじめはひとびとをたぶらかしているかのように受けとられても、終わりまで聞くならば、みなそれを認めるのであった。筆で文章を書くにしても、そういうふうだったし、実際の行ないについても、やはりそんなぐあいだった。

県に勤めていたとき、位は掾功曹に進んだが、都尉府に勤めていたときも、位はやはり掾功曹だった。郡の長官の府に勤めては掾五官功曹行事に列し、州の役所にはいつては從事（佐史）となった。世間に名を売るようなことは好まなかったし、損得に動かされるようなこともなかった。いつもひとの長所だけを口にし、ひとの短所をいうようなことはほとんどなかった。うだつの上がらないものを推薦することにつとめたり、すでにその地位にあるものには、その過失

や正しくないところを指摘してやったりしたが、それを誇るようなことはなかった。過失を指摘してやらないまでも、けつしておとしいれたりすることはなかった。ひとに大きな過失があっても許してやり、また、ひとの小さな非行などは忘れてやった。自分が行き届くことを願ってはいしたが、自分をひきたたせようなどとはしなかった。品行を第一とすることにつとめ、才能を看板にするようなことを恥とした。多人数が集まった席では、問いかけられないかぎり口をひらかなかつた。長官や將軍に謁見を許されても、話が自分にまわってこなければ、口を出すようなことはしなかった。郷里に引退しては蘧伯玉きよはくぎよくの操を見習い、朝廷に出仕しては史子魚ししぎよの行ないに近づこうとした。中傷されたとして弁明しようとはせず、地位が進まなくても恨みを持つようなことはなかった。貧乏して身を養うわずかの土地さえなくても、氣持は王公よりも安らかであり、地位が低くてなに

がしかの祿さえなくても、万石の祿を受けているようになつていた。官職にありついたからとて喜ぶでもなく、地位を失ったからとて恨むでもなかった。安樂していても欲に流れることなく、貧苦のときでも志のたゆむことはなかった。そして、古書に読みふけったり、これはと思う話に聞きほれたりした。けれども、世間の書物や世俗の話には、納得のいかないことがたくさんあるので、静かなところにひとりひきこもり、それらが誠か偽りかを究明した。

充は心がきれいで落ち着いた人間であり、つきあいにはかならず友をえらび、いいかげんな交わりをすることは好まなかった。友とするものはといえば、たとえその身分が賤しくても年が若くても、行ないが俗離れしていさえすれば、かならず友好を結ぶというふうであった。ひとかどの友人だとか、洗練された人物だとかが好きで、やたらに俗物どもと結ぶ

ということではしなかった。俗物どもが、ちょっとしたその過失をとらえては、なにかといふらして、おとしいれようとしても、最後まで自分を釈明するようなことはせず、またその人間をとがめたり恨んだりすることもなかった。

それで、こういうひともあった——りっぱな才能をそなえ、すぐれた文章を書きながら、罪もないのにおとしいれられて、それでどうして弁明しないのか。かの羊勝（ようしょう）のやからが、ことばたくみに讒言（ざんげん）したとき、鄒陽（そうやう）はわれとわが身を釈明し、投獄されはしたものの、また出てきたではないか。^(注九)行ないが完全であるからには、ひとにけちなどをつけれないほうがよいのだし、しんぼうよく自己を貫いてきたからには、ひとに押えつけられたりなどしないほうがよいわけではないか——。

その答はこうだ。清らかでさえなければ塵をつけられることはなく、高くさえなければ脅かされるこ

ともない。広くさえなければ削られることはないし、満ちさえしなければ欠かれることもない。「士（し）たるものはとやかくいわれ」て、ひとにおとしいれられるというのも、思えばもつともなことだ。榮進したいと思えばこそ釈明もするのだし、落とされたくないと思えばこそ陳弁も試みるわけだ。ところが、この自分には、どうなりたいたか、なりたくないとかいうことはないのだからして、だまっただま何もいわないのだ。羊勝が讒言したのは、なにかが彼にそうさせたのであり、鄒陽が助かったのも、なにかが彼を引き出したのだ。孔子は命（めい）（天命）といふことをいっており、孟子は天といふことをいっている。^(注一〇)吉凶安危は人にあるのではない。むかしのひとにはそのことがわかっていたので、命にまかせ、時にまかせ、心を大きく持ってこたわらず、だれを恨んだりとがめたりすることもなかったのだ。福がやってきて、自分がものにしたとは思わず、禍がやって

きても、自分が招いたとは思わない。それで、時に榮進したからとて満足したつもりにもならず、時に退けられたからとて不足だという氣も起こさないのだ。不足をきらって満足を求めようとせず、困難を避けて安易につこうともしない。知恵を売りこんで祿にありつこうとせず、位階を辞退して名声を釣ろうともしない。榮進をむさぼって自分を釈明しようともせず、落とされることをきらって人を恨もうともしない。安危にとらわれることなく死生も差別せず、吉凶に左右されることなく成敗も氣にせず、十人の羊勝にであつても、傷つけられるとは思わない。なにかといえば天にまかせてしまうので、自分から釈明するようなこともない。

充は慎みぶかくてさっぱりしており、富貴をむさぼるようなことはしなかった。上に認められ、ひきあげられて特進したからとて、べつに高い官を望む

わけでもなかった。また、上に認められず、退けられて小さくなつていたからとて、地位の低いことに腹をたてるわけでもなかった。県の役人に加えられたときも、えりごのみはしなかった。

それで、こういうひともある——内心では不承知ながら、なにくわぬふるまいをし、氣のあうものだけを友としたがり、ところも選ばずに仕官し、操を汚し行ないを傷つけるようなことを、世間はなんで見習うだろうか——。

その答はこうだ。見習えるものといえ、孔子にまさるはない。その孔子は、仕官するのに、えりごのみはしなかった。乗田（官有牧場の下役人）や委吏（官有倉庫の番人）になつたからとて、それを嘆くような氣持はなく、司空（土木工作関係の大臣）や相国（宰相）になつたからとて、それを喜ぶような様子もなかった。また、舜が歴山（山東省）で百姓をしていたときは、そのままで終わるつもりでい

たし、堯ぎょうから帝位を譲られたときは、自然にそうなつたという氣持でいた。徳が豊かでないことを氣に病むとも、位階が高くないとて氣に病んではならず、名前に汚点がつくことを恥じるとも、地位の進まないことをきらつてはならぬ。垂棘すいきよく（春秋時代の晉の地名。宝玉の産地）の白玉と瓦のかけらとが、おなじ箱にはいつていたとしても、また明月の珠たま（古代の有名な宝玉の名）と石ころとが、おなじ袋にはいつていたとしても、二つの宝の實質さえ備わつてゐるならば、たとえ世人に混同されたとして、べつにさしつかへはない。世人に善を知ることができぬならば、身分の賤しいひとでも世にあらわれることだらうし、世人に潔白さを見わけることができなければ、身分の尊いひとでも恥ずかしめられることがあらう。身分は賤しくても、尊いものと等しく操を持し、地位は低くても、高いものと徳を競うというふうであれば、それでよろしいのだ。

世俗さかの性として、榮進するひとにはまといつき、落とされるひとには相手にならず、うまくいっただとは自分の手柄とするが、しくじったことには知らぬふりをする。充がとりたてられて地位にあるときには、たくさんの人間が蟻あみのようにくっついていたが、浪人してわびずまいをするとなれば、むかしなじみも寄りつかなくなつてしまつた。

それで、世人のそうした義理知らずを憤り、ひまにまかせて『譏俗節義きくせつぎ』十二篇を書いたわけだ。そして、世人がこの書物を読んで目をさましてくれることを期待するがゆえに、率直で露骨な文章にし、通俗的なことばで綴つてみた。それで、深みのない文章だとけなすひともあるが、それにたいする答はこうだ。聖典をこどもにみせたり、高尚なことばで田舎者にお説教したりしても、理解することはできず、かえつて、みな反感を持つようなことにならう。それだからこそ、蘇秦そしんが趙ちやうの李兌りたいにこまごまと説い

ても、李兌はよい顔をしなかつたのだし、商鞅(注四)が秦の孝公に王道を説いても、孝公はかれを登用しなかつたのだ。だいたい、相手の心が求めているものを与えずに、堯や舜のことばのあるたけをならべてみても、それは牛に酒を飲ませたり、馬に乾肉を食わせたりするようなものだ。そんなわけで、雄大で美しく、深遠で心のこもったことばというものは、器量の大きなひとには通じるけれども、器量の小さなひとには通じないのだ、仕方なしに、むりに耳をかたむけてみたところで、心のなかにはまづはいらない。

孔子が野良で馬をとりにがしたとき、それを野良人が捕えて返さないで、子貢がもったいぶったあいさつをすると、その男は怒ってしまった。ところが、馬丁が心安げにかけあうと、かれは機嫌をなおしたという。(注五)世間一般はあからさまなことばでない

というのは、神仙の薬（不老不死の薬）を調合して風邪をなおそうとしたり、貂(てん)や狐の皮の着物を仕立てて薪や野菜を採りにいこうとしたりするようなものだ。

それに、礼にも整えないでよいところがあり、事にも採りあげないでよいところがある。判決をくだして罪を見きわめるのは、かならずしも皋陶(こうよう)（舜のときの檢察長官）でなければならぬことはなく、菜(さい)つばや菹(じゆ)の調味くらいならば、狄牙(てきが)（齊の桓公に仕えた調味の名人）でなくてもよろしい。民間の音楽に韶(しやう)（舜が作った音楽）や武(ぶ)（周の武王が作った音楽）は用いないし、鎮守の女神の祭に太牢(たいらう)（牛・



狐裘図

羊・豚を用いる正式の供物）は必要でない。

このように、「必要」でないものもあるが、またこんなものは「適當」でない。たとえば、牛を裂く刃物で鶏をこしらえたり、戟（きさき）をつきだして菜っぱをとったり、おのやまさかりで箸をけずったり、鉢やかめから杯についだりするのは、大小が「適當」でないのだが、そうしたことを然るべくやれるひとは少ない。では、どういうことを弁（わ）がたつというのか。浅いものによって、深いものを理解させてやることだ。どういうことを知恵（ちえ）というのか。やさしいものによって、むつかしいものを理解させてやることだ。賢者・聖人は、読むひとの才能に適當なところを工夫するがゆえに、その文章は深い浅いの加減がうまくできているのだ。

充は、さきに世間の人情を憎むところがあって、『譏俗』という本を書いた。また、君主たるものの

政治が、ただ人民を治めようとするばかりで、そのよろしきを得ず、なすべき術（すべ）をさとらず、心配したり苦慮したりで、なりゆくさきもわからない、というありさまなのを憐むがゆえに、『政務』^{（注七）}という本を書いた。それからまた、偽りの書物や低俗な文章など、真実でないものがたくさんあることを嘆くがゆえに、『論衡』という本を作ったのである。

いったい、むかしの賢者・聖人が世を去ったあと、大義（儒教の根本精神）の解釈は分裂し、踏みあやまっておのがじしに進み、それぞれに派を立てるといふありさまで、通人（いちおう学問に通じたひと）がそれを見ても、調べて正すこともできぬ。はるかむかしから伝えられた教えを聞き集め、聞きとったことを書きしるしたのは百年まえのことだ^{（注八）}ったが、そののち久しく日がたつと、それがまた上古のことと考えられるようになった。そして、そこにもっともらしいことでも述べられてみると、骨の髄まで信

じこみ、それから脱けだすことができないということになった。そんなわけで、ここに真実の論を書いてみたのである。その文章は堂々とし、その論鋒は痛烈で、うわべを飾った偽りの文句など、審判をくだされぬものとはなかった。飾りたてた偽りの上品さなどを退治して、真心のこもった質朴さを残し、墮落した氣風を取り除いて、伏羲（ふつぎ）（古伝説中の高德の天子）のむかしのしきたりにもどそうとしたのである。

充が書いた本は、あからさまで読みやすい。それで、こういうものもある——弁のたつひとのことばには深みがあり、筆の達者なひとの文章には奥ゆきがある。経書の文章について考えるに、賢者・聖人のことばは雄大莊重で、美しくも洗練されていて、おいそれとは理解しにくいものだ。そこで世間のそれを読もうというものは、古語の意味を研究して、

やっと理解するのである。要するに、賢者・聖人の器量が大きすぎるために、その文章やことばが世俗に通じないのだ。宝玉は石のなかに隠れ、白珠は魚の腹にひそみ、玉の職人や珠の細工師ででもなければ、採取することはできぬ。宝物は隠れていて見えないのだからして、真実のことばもまた深遠で計り知れないのがよからうというものだ。『譏俗』という本は、世間一般にわかってもらいたいがために、その趣旨をあからさまにし、割り切った文章にしたということだが、『論衡』という本も、どうしてまたそうなのか。まさか、才能がきわめて浅いために、深く覆うことができないというわけでもあるまい。なんとまあ文章がはつきりしていて、かの経書と軌を異にしていることか——。

その答はこうだ。玉は石のなかに隠れ、珠は魚の腹にひそみ、ことさらに深く覆われている。しかし、その玉の色が石の心を透して現われ、珠の光が魚の

腹からさし出るといふことになれば、それでもなお隠せるだろうか、自分の文章が、まだ書き札のうえにまとめられず、胸のなかにしまわれているあいだは、玉が隠れ、珠がひそんでいるのとおなじことだ。それが外に現われるとなれば、玉の色が石を透し、珠の光がさし出るようなものではないか。そして天体の明るさにも似て光りかがやき、地理の定かさにも似て筋道がたち、疑わしいことや、隠されていることなどを、みなすっきりとさせることができるのだ。そして、すっきりすれば、ことはひとりで落ち着くのである。

「論衡」とは、論の平（はかりで重さを計ること）ということなのだ。口をひらけば、その任務はことばをはっきりさせることにあり、筆をとれば、その任務は文をあらさまに書くことにある。すぐれた人物の文章は、よく洗練されているが、了解できないようなことばとはなく、見分けのつかないような

内容とともない。したがって、それを読むひとからすれば、めくらの目がぼっかりと開いたり、つんぼの耳がすつと通じたようなものだ。三歳までめくらだった子供は、ふと父母が見えるようになったとはっきりそれとわかりはしないのだから、なんで嬉しがったりするわけがあらうか。道ばたに大木があったり、濠のそばに長い溝があったりすれば、その所在は明らかで、気のつかぬひとはない。けれども、その木が大きくなってめだたないとか、その溝が長くなってかげになっているとかすれば、これだぞといつてひとに示しても、堯や舜でさえもまごつくだらう。

人間の顔には、色の現われかたによって七十あまりの部位がある。ほおがさっぱりしていて、その五つの色（青・赤・黄・黒・白）がはっきり見わけられるならば、心のなかの隠れているもの、かすかなもの、心配や、喜びなどを、すっきり見ぬくことが